

じのように大阪は桃山時代（一五八三～一五九八年）には豊臣武家政権の首都であったが、大阪夏の陣（一六一五年）に徳川方に敗北して、すべてが灰燼、焦土と化してしまった。

当時の様子を伝える古文献によれば「大坂にこもりたる衆は、命ながらへたる衆は、ことごとく具足をぬぎ捨て、裸にて女子もにげちる」（大久保彦左衛門『三河物語』）とあり、つまり戦闘員だけではなく大阪城周辺にいた非戦闘員（町衆、女、子供など）も惨殺されたと記述されている。

また、「多くの人は約十万人が死んだ」と言い、町の中で殺された人々のほか、合戦が行われた周辺も死体で埋まっていた。大坂の川（大川）は水が豊富で非常に深いだけに、敵の武器や火事を免れようとした多くの人々のために、かえつて墓場と化した。川底は死体で埋もれ、向岸へ渡ろうとすれば、その上を歩かねばならぬほどであった」（切支丹研究第十七集『耶蘇会史料』）といった記録などもある。

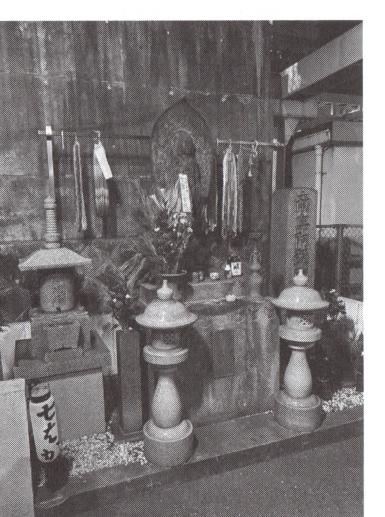
大阪は古くは蘇我・物部の争いや、戦国時代の石山本願寺の戦いなど、歴史上、何度も戰

乱にあつているが、中でも太平洋戦争時の大阪空襲の被害は甚大だったとよく語られる。

昭和二十（一九四五）年十月の大坂府警察局の調べでは大阪府域では死者一万二千六百二十六人、行方不明者二千百七十三人で、約一万五千人の犠牲者が出土と記録されている。

大変、痛ましい悲劇だが、大坂夏の陣では約十万人（どこまで事実であるかわからないが）もの人々が殺されたというのだから、じつは大阪大空襲よりも大坂夏の陣こそが、大阪という都市が経験した史上最大のジエノサイドだつたといえるだろう。まさに大阪は、どこを歩いても

いえるだろう。実際に大阪は、どこを歩いても町の元老院碑（京橋空襲慰靈碑）（写真提供：陸奥氏）



血で汚され、累々たる死者が横たわる「ネクロポリス」（死者のまち）となってしまった。その後、江戸幕府の主導で、大阪復興が行われるが、その際に日本全国各地から集団就職のように戸衆が集まってきたが、彼らの多くは、戦国時代の長い戦乱によって、主君や土地を失った武家だった。

実際に、元禄時代に、あまりの財力で商人の分限を超えていると幕府から咎められて闕所（財産没収）処分を受けた伝説的な大阪豪商の淀屋は元は信長に滅ぼされた岡本家の子孫であつたし、また財閥として現存している住友家は秀吉に滅ぼされた柴田勝家の家臣の子孫であり、鴻池家もまた毛利氏に滅ぼされた山中鹿之助の子孫であつた。

こうして先祖伝来の土地や故郷を奪われた無数の敗北者たち、流れ者たち、無縁者たちの懸命の働きによって、江戸時代の大坂は、商業流通都市「天下の台所」として、劇的に復活、発展していく。夏の陣（一六一五年）から「浮世」と浮かれ騒いだ元禄時代（一六八八～一七〇四年）に至る経済成長のダイナミズムは、じつは戦後

の高度経済成長に匹敵するほどの規模とエネルギーであったのかも知れない。

ただ、江戸時代と戦後で決定的に違うのは、江戸時代は絶対封建社会の世の中で、商人階級は社会的に差別、抑圧されていた存在だった。なにか商人が武士に対して不届きなことをすれば、「無礼打ち」をしても許される（公事方御定書）七十二条）という恐ろしい時代で、どれだけ富を蓄積しようとも、本質的に商人の社会的な立場は弱かつた。幕府の財産没収の命令で、有無を言わざずに、あつという間に潰されてしまつた大豪商の淀屋などは、わかりやすい事例だろう。

そして筆者が思うに、こうした社会的弱者の最たるもののが、誰にも供養されない死者＝無縁仏であるので、当時の大阪の町衆が無縁仏にシンパシー（同情）やエンパシー（共感）を持つのも不思議ではなかつたと推察している。そういった商人の社会的抑圧から無縁仏を供養する大阪七墓巡りの風習が起つたといふことも考えられる。

また七墓の一つとして挙げられる野江墓地は、

筆者は推察している。

（次号へづく）

品質が未来に繋がる

墓石、外柵、彫刻、建築材、日本と31年の「実績」が「信用」を証明します。

<http://www.youzhistone.com> E-mail:info@youzhistone.com



泉州有志石材有限公司
惠安明剛石材有限公司

〒362131 中国福建省泉州市惠安縣崇武鎮溪底工業区
TEL:+86-595-87685588 FAX:+86-595-87682279